
獣の咆哮 -Roar-

sorapon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獣の咆哮 - Roar -

【Nコード】

N7139X

【作者名】

sorapon

【あらすじ】

研究機関や企業の発展を目的とした地方の新開発都市。人々はその街を『新都』と呼称し、多くの人に移り住んでいった。しかしその急な開発計画を快く思わない者たちもいた。彼らの名は反社会組織『AGB』、その組織の末端である青年はとある雨の日に少女とであう。

雨音。

叩きつけるような、滝の音を少し弱めたような、それでもなお強い雨音が響く。

その雨は光を反射して光はしない。

黒い、漆黒よりもなお黒い。

呪うような色、まるで引きずり込もうとするかのような深さで、

その黒い雨は降り続く。

時刻は夜。

街灯や家々から漏れる明かりだけが光源になるはずの、その時間。しかしそんな時でも、今日は昼のように明るい。

ふと気が付けば、サイレンの音。

そして遠く、灰色の、赤や青そして白い明かりに照らされるビルを中心に、誇るように立つ塔のような建造物。

その傍らで、大きな炎が踊っている。

雨 色はおかしいが、それでも雨は降っているというのに、一切その炎が止まる気配はしない。

通りには多くの人が溢れている。

燃えているのは大きなビル地帯、研究所という小さな看板が見えることから、そう言った施設が集まる場所だったのだろう。

雨足が強まっても炎は消えず、次第に薬品が燃えているのだろうか、蛍光色の煙も吐き出し始めた。

予想外の大火災に慌てているのか、消防隊も手が回らないように見える。

「放水が足りない！もつと水回せ！科学班も真面目にやれ！」

「早く避難させろ！何してる巻き込まれるぞ！」

「また爆発だ、放水よりも被害の拡大を防げ！燃えるものを壊すか遠ざけるかしら！」

家族の名前を叫ぶ声や、恋人の所在を知って無く者の声が雨の夜に響いていく。

炎に照らされる中央の塔は、まるでアリを見下す人のように無表情に、ゆらゆらと輝いている。

雨。

嵐という方がいかもしれない。

それほどまでに降っているというのに、地を流れるのはほんの少し。

アスファルトに当たった黒い雨は、染み込むこともなくはじけて消えていく。

少しだけ溜まった雨を引き伸ばすように、這いずる影がある。

街灯の明かりも届かないような、大きな路地の見える細く小汚い小路地。

あの火災から逃げ出したのか、服の裾や髪の一部が焼け焦げている。

焼けて袖のなくなった白いローブのような、囚人服にも見えるそれから覗く腕は擦り傷で赤く染まっている。

裸足のままアスファルトを走ったせいで、足の裏も血にまみれている。

顔立ちが少年のよう、年は恐らくまだ10かそこらの少年だろう。せき混じりの荒い呼吸を繰り返し、這いずり、四角いゴミ箱にどうにか寄りかかる。

空はまだ雨を吐き出している。

白い衣をまとった、黒髪の少年は、孤独さと神々しさを感ぜさせる。

細く長いまつ毛のかかる目を開くと、焦点の合わない目で明るい通りを見る。

黒い雨が降るそのさまがおかしかったのか、力のない笑みを浮かべると、うなだれるようにしてまた目を閉じる。

黒い雨は、吹き続ける。

街灯の下に、ひとつの影がある。

それは未だ慌ただしい炎の群れを見やると、少年のいる路地へ足を進める。

影、黒ではない、この雨と同じような色のコートで全身を覆うその様はまさに影。

フードから溢れ出るふた房の銀の髪を見なければ、誰もが霊か何かだと思い逃げ出すだろう。

影は足を止めると、真っ白い、日焼けを知らないような気色の悪いほどの白い肌の顔を、ちらりと露出させながら少年を見る。

表情は読み取ることができない。

少年は足音に目を開き、視線を合わせた。

「おまえ　　は　　誰だ」

かすれた弱々しい声で、少年は問いかける。

影は答えず、街灯を背にして影を作るようにしながら、少年を見つめ続ける。

彼らの間には、まるで大火災が起こり慌てるモノたちの起こす騒音など、まったくくないような静けさがある。

時間にすれば数秒、一切の動きもない。彼らは見つめつた。

影に感情はなかった。少なくとも、読み取ることができない。

何故か少年は、散る際の花のような印象を影にうける。

もう一度、今度は先程の警戒心は無く、ただ興味を持って問いかける。

「お前は　　誰、なんだ」

影がわずかに揺れる。

大通りを、大きな車両が走る。その明かりで、影の口元が見えた。わずかに、笑み。

試すような笑いだ。

慣れたような口調で、滑らかに答える。

「私は繋ぎ止めるための物だ。」

再びの静寂。

影の発した声は、凜とした女性を彷彿とさせる。しかし同じように、壊れた機械の発するノイズのようにも聞こえる。

人が発することができる限界のような声。

「再び会うことができた、再びあいまみえた。」

君は知らない、しかし私は知っている。

それは繰り返してはない、『それ』は私そのものだから。」

理解のできない言葉を影は紡ぎ続ける。

通りでは、車の行き来が多くなってきた。

炎は未だ鎮火せず、雨も降り続けている。

少年は、引き込まれていた。彼女の黒に、そして言葉に。

「少年。」

呼びかけられる、言葉は一言。

少年は立ち上がるうとするが、傷だらけの体がそれを拒否する。

背をあずける箱が小さく音を立てて凹む。それを見てか、影は数

歩少年へ足を進め、彼へと手をさしのべる。

「少年、そして人の子よ。」

君は生きる意味を、生の約束を覚えているか？

その約束を刻んでいるか？」

少年は、影の顔を見た。

赤い瞳。

「それを知らぬのなら、探そう、探せ、探したまえ。それが生きる答えとなるまで。」

君に無いなら誰かに問え、誰かにないなら君が創れ。

生きる意味を差し出してくれ、答えが約束だ。」

少年は、影の瞳を見入る。

影の声は、声を発する毎に透き通ってゆく。

次に発する声は、人をもう一度超えた神々しさを内包する。

「始めよう探求の旅を。」

白くしなやかな手。雨の黒とはまた違うような、引き込まれる感覚。

少年は抗わない。

傷だらけの、火傷が目立つ骨の浮き出た手で影の手をつかむ。

通りは静かだった。しかし炎は、雨は止まない。

炎に照らされる街を背に、焼けて朽ちる音を背景に、叩きつける
雨を演出のように。

彼らは手を取り合った。そして、少年は立ち上がる。

衝撃、揺れで、影のフードが落ち、頭部が露になる。

それはまるで絵画のような光景だった。

闇に沈んだ白い衣の少年を、光を背にする銀の髪の聖女が手を伸
ばし、導く。

旅は始まる。生の意味を知るために彼は立つ。

空へ。灰色の木の立つ荒野を発ち、黒き雨を吐く雲の向こう、果
てない青の空へ。

旅は、始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7139x/>

獣の咆哮 -Roar-

2011年11月18日00時18分発行